

2016年「會津八一の歌を映す」

第10回

秋艸道人賞・写真コンテスト

公益財団法人
會津八一記念館



【第9回秋艸道人賞受賞作品】
伊藤政幸氏（新潟市西区）
二本の傘杖つきて 赤き火に 燃えたつ宿を のがれけるかも



秋艸道人賞トロフィー（天つ乙女 原像

東京藝術大学学長
宮田亮平先生作

趣 旨

秋艸道人・會津八一は東洋美術の研究者として世に知られ、早稲田大学の芸術学研究の基礎を築いた人物です。日本の伝統文化をこよなく愛し、斑鳩や奈良の地をたびたび訪れ、古代の仏像やその風情を歌によみ、みずから筆をとり、書にしたためました。

古人は「詩は絵のごとく」と語っていますが、八一の歌はこの言葉を彷彿とさせるものがあります。さらに踏み込んで、そのイメージからは、風のそよぎ、あたりのかぐわしい香り、耳を澄ませば、しじまの中でのかすかなもの音まで聞こえてくる想いがします。また八一は「歌は読むものではなく耳で聴くもの」との信念から、音調美の表出を心がけており、齊藤茂吉は「その声調流動し、新鮮な果実の汁のごとし」と讃えています。

この八一の和歌の素晴らしさを、永遠に万人の胸にとどめてほしいという想いから、本記念館は平成18年度から「會津八一の歌を映す 秋艸道人・写真コンテスト」を開催しております。歌人あるいは俳人を顕彰するための、短歌や俳句のコンテストは全国各地で開催されていますが、「歌を映す」という試みは、この企画において他にはみられません。

この写真コンテストのねらいは、八一の短歌をただ視覚的になぞるといったものではありません。また八一の歌は、古代への憧憬にとどまりません。四季おりおりの自然に寄せる想い、戦争への怒りとむなしさ、混乱期に病死した養女への悲歌といった、生身の人間としての感慨を詠じた名歌も数多くあります。八一の短歌のイラストではなく、その歌をモチーフに万人の心に響く心象風景を自在に映像化していただきたいというのが、このコンテストの趣旨です。

このコンテストも記念すべき第10回を迎え、上記の趣旨のご理解が広がりつつあります。プロやアマチュアを問いません、ぜひとも多数の独創的な写真をお送りいただきたいと思います。

秋艸道人の歌について、あらためて知りたいと思う方々には、本記念館発行の『會津八一 悠久の五十首』（改訂版）がよい手引きになると思います。前年度の入賞作品および、審査員の講評については、当記念館友の会・秋艸会機関紙「秋艸」を取り寄せてご覧ください。

主催：公益財団法人會津八一記念館
共催：早稲田大学會津八一記念博物館、新潟市、胎内市、新潟日報社、BSN新潟放送
協賛：セコム上信越、コニカミノルタNC
協力：浅川園、今成漬物店、大阪屋、里仙、高橋酒造、新潟フジカラー
後援：共同通信社、時事通信社、読売新聞新潟支局、毎日新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、日本経済新聞社新潟支局、NHK新潟放送局、N S T、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21

新潟市 會津八一記念館



會津八一 人と業績

會津 八一（あいづ やいち） 明治14年（1881）～昭和31年（1956）
新潟市古町生まれ。明治39年、早稲田大学文学科卒業後、新潟県上越市（旧板倉の有恒学舎＝現県立有恒高校）の英語教師に。43年、有恒学舎を辞し、早稲田中学校に転職。大正7年、早稲田中学校教頭に就任。同9年から昭和25年頃まで頻繁に奈良へ旅行する。大正13年、歌集『南京新唱』刊行。大正15年から早稲田大学で東洋美術史の講座を担当。昭和6年に早稲田大学文学部教授となる。同8年、『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』を執筆し、翌9年文学博士に。同15年、歌集『鹿鳴集』、17年、随筆『渾齋随筆』、19年、歌集『山光集』を刊行。秋艸道人（しゅうそうどうじん）、渾齋（こんさい）、八朔（はっさく）などと号した。昭和20年、空襲により被災し、新潟に帰郷。同22年、歌集『寒燈集』、書画図録『遊神帖』を刊行。同26年、新潟市名誉市民第1号に。同年、『會津八一全歌集』を刊行、読売文学賞を受賞。同28年、宮中歌会始の召人として臨席。同31年に死去。享年75歳。

（キリトリ線）

2016年「會津八一の歌を映す」第10回 秋艸道人賞・写真コンテスト 応募票

申込者	氏名	（フリカナ）					
	性別	男 ・ 女	生年月日	年	月	日生	歳
住所	〒（ ）						
職業							
TEL	—	—	FAX	—	—		
E-MAIL							
写真歴	年	プロ	アマ	いずれかに○をつけてください （統計資料にするため審査には関係ありません）			
撮影年月日	年	月	日				
撮影場所							
テーマにした短歌							
対象物の地域や名前							
このコンテストを、どこでお知りになりましたか。							

太線の枠内に記入の上、応募写真の裏側に写真の天地が分かるように軽く貼って提出してください

受付専用記入欄

*受付:	年	月	日	*No.
------	---	---	---	------

公益財団法人 會津八一記念館
〒950-0088 新潟市中央区万代3丁目1-1
新潟日報メディアシップ5階
TEL.025-282-7612 FAX.025-282-7614
info@aizuyaichi.or.jp

キリトリ線

2016年
「會津八一の
歌を映す」

第10回

秋艸道人賞・
写真コンテスト

■ 公 募 規 定

【目 的】
本賞は東洋美術史家、歌人、書家であった會津八一の短歌のイメージを写真で表すことによって八一の業績を理解する上で分かりやすく親しみやすい工夫を凝らす活動の一環です。美術や文学をテーマにした写真の普及を奨励し、併せて會津八一の業績を今日的に再生させることが目的です。最高賞の名称を會津八一の号にちなみ「秋艸道人賞」とします。

【主催、共催、協賛、協力、後援】
主催 公益財団法人會津八一記念館
共催 早稲田大学會津八一記念博物館、新潟市、胎内市、新潟日報社、BSN新潟放送
協賛 セコム上信越、コニカミノルタNC
協力 浅川園、今成漬物店、大阪屋、里仙、高橋酒造、新潟フジカラー
後援 共同通信社、時事通信社、読売新聞新潟支局、毎日新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、日本経済新聞社新潟支局、NHK新潟放送局、N S T、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21

- 【応募資格】
プロ、アマを問いません。
- 【応募条件】
- ① 応募写真はすべて個人の投稿制とします。
 - ② 応募者は応募作品の制作者であり、かつ応募作品の著作権を完全に保有していること。
 - ③ 『會津八一 悠久の五十首』（改訂版・新潟日報事業社刊）に掲載されている50首（右に代表歌数首掲載）のいずれか1首をテーマにしたものに限ります。
 - ④ 応募者1人につき1首には1作品で、2首2作品まで応募できます。
 - ⑤ 応募作品には、応募票（テーマにした會津八一の短歌、撮影の日時と地名、被写体の固有名詞＝寺院名、仏像名など＝を必ず記入する）を必ず作品の裏面に写真天地が明確になるように貼りつけること。2首2点を一緒に応募する場合は1点ごとに応募票を貼りつけること。
 - ⑥ 被写体（寺院、仏像、人物など）に対しては応募者が了解をおとりください。
 - ⑦ サイズは半切印画紙（356×432mm）にプリントしたものに限ります。このサイズは入賞・入選の場合、展示に耐えられる必要のためです。
 - ⑧ 規格外サイズや額入り、台紙、パネルに貼ったものは応募できません。
 - ⑨ 応募作品は入選歴のないものに限ります。

【応募方法】
応募者は郵送か宅配便で当記念館に送付すること。送付費用は応募者が負担してください。郵送の場合は必ず書留にしてください。

【応募費用】
無料です。

【応募受付期間】
2016年11月4日（金）から2015年11月15日（火）まで。
締め切りの11月15日当日消印（または宅配受付・持参）有効。

【賞の構成】
秋艸道人賞 1点
正賞：「天つ乙女」像（東京藝術大学学長・宮田亮平先生作）と賞状。副賞：10万円
奨励賞（共催団体名付き） 5点 賞状 副賞各3万円
◆表彰式・祝賀会に出席する際の交通費・宿泊費（1泊分）は、秋艸道人賞および奨励賞の受賞者のうち、新潟市以外に在住する方々については主催者側が負担します。

入 選 約20点
賞状と副賞は會津八一ゆかりの食品（清酒、漬け物、お茶、銘菓のいずれか1品）。

【審査員】
浅井 慎平 写真家（テレビコメンテーター）
和泉 久子 鶴見大学名誉教授
塚原 史 早稲田大学法文学部教授（早稲田大学會津八一記念博物館館長）
若松 保広 仏教美術写真家、奈良・飛鳥園専属
神林 恒道 新潟市會津八一記念館館長（大阪大学名誉教授）

【審査】
審査選考は會津八一記念館が設ける公募写真選考委員会の責任と権限において合議で行われ、秋艸道人賞（最優秀賞）および奨励賞、入選を決めます。

【発表】
2016年12月中旬（予定）、後援の報道機関を通じて全国に向けて発表および個人宛てに通知。

【表彰式兼講評会】
1月末～2月上旬（予定）、会場は新潟市内の施設。
最高賞「秋艸道人賞」と奨励賞の受賞者々々には表彰式出席の際の交通費と宿泊費の全額（実費・新潟市以外の在住者に限る）を主催者側が負担します。

【返却】
事務局態勢上、応募作品は原則的に返却できませんのでご了承ください。

【展示】
入賞作品は翌年度内に当記念館はじめ全国の巡回展会場で展示します。

【著作権と出版権】
受賞作品の著作権は制作者本人に帰属します。ただし公益財団法人會津八一記念館の広報活動のための出版物等へ無償で活用させていただきます。当館刊行以外の出版物へ転載等する場合は制作者の同意を前提とします。

【個人情報】
応募者から提供された個人情報は今後の「秋艸道人賞」写真コンテストの公募告知および會津八一記念館の各種事業の告知に利用することがあります。

【作品の送付先と問い合わせ先】
〒950-0088 新潟市中央区万代3丁目1-1 新潟日報メディアシップ5階（公財）會津八一記念館
「秋艸道人賞」事務局 電 話 025(282)7612
ファクス 025(282)7614
e-mailアドレス info@aizuyaichi.or.jp

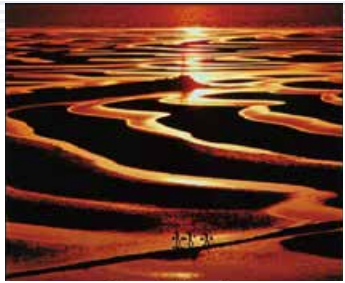
第9回 受賞作品



【早稲田大学會津八一記念博物館賞】
高野 榮子氏（新潟県五泉市）
「山鳩は 来鳴き響もす ひねもすを
聞きて眠れる 人もあらなくに」



【審査員特別賞】（會津八一記念館開館40年記念）
宮川 美代子氏（新潟市秋葉区）
「レンヤモンの 重きかかるとに まるび伏す
鬼のもだえも 千年経にけん」



【新潟市長賞】
曳野 利氏（福岡県北九州市小倉北区）
「都辺を のがれ来たれば ねもごろに
潮うち寄する ふるさとの浜」



【胎内市長賞】
伊藤 春男氏（新潟県新発田市）
「天地に われひとりいて 立つごとき
このさびしさを 君はほほ笑む」

【新潟日報社賞】
石森 文夫氏（福島県いわき市）
「大らかに もろ手の指を 開かせて
大きほとけは 天足らしたり」



【BSN賞】
千田 多喜子氏（愛知県名古屋守山区）
「あせたるを 人はよしとう 頻婆果の
ほとけの口は 燃ゆべきものを」



「秋艸道人賞」写真コンテスト ■ 50首のうちの代表歌7首

おおてら まろ つきかげ つち おも

① 大寺の 円き柱の 月影を 土にふみつつ ものをこそ思え

（訳：唐招提寺金堂の 月の光をうけた 円い列柱の 長い影を 地に踏みながら 行きつもとどろつ 古い 奈良の都を思い 遠い世の ギリシャの神殿を思う）

すいえん あま おとめ こももで す あき そら

② 水煙の 天つ乙女が 衣手の ひまにも澄める 秋の空かな

（訳：はるかな薬師寺東塔のいただき 美しい透かし彫りの 水煙は 空と重なって 天上世界をつくる 水煙の 飛雲の中に舞う天女 天衣のすき間からさえ 澄んだ秋の空が見える）

あめつち た きみ え

③ 天地に われひとりいて 立つごとき このさびしさを 君はほほ笑む

（訳：天地の間にわれひとりたたずむ この孤独の間を 〈法隆寺の〉救世観音は 秘仏の昔から ほっそりと ほほ笑んでいらっしゃる）

はつなつ かぜ お ゆび し

④ 初夏の風となりぬと みほとけは 小指のうれに ほの知らすらし

（訳：〈瞳燃え〉〈ころ燃える〉初夏の南風が到来したと みほとけは しなやかな 小指の先で ほのかに感じていらっしゃるようだ――）

おお ひら あまた

⑤ 大らかに もろ手の指を開かせて 大きほとけは 天足らしたり

（訳：大きくゆったりと 両手の指を伸ばして 人々を救うしるしの〈印相〉をお示しになる 右手は何ものも恐れない心を与える〈施無畏印〉 左手は念願をかかなる〈与願印〉 こうして東大寺大仏は あまねく世界を照らしていらっしゃる）

き た かね よ ゆめ い たま

⑥ ひそみ来て 誰が打つ鐘ぞ さ夜ふけて ほとけも夢に入り給ころ

（訳：ひそかにお参りをしているのは誰かしらん 観音堂に鐘の音がする 夜もふけて ほとけも人の夢に 〈ほのかに〉姿をお見せになるころ というのに）

みやこべ き しお よ はま

⑦ 都辺を のがれ来たれば ねもごろに 潮うち寄する ふるさとの浜

（訳：焦土の都を逃れて来ると ふるさとの 浜波が まず ひたひたと 打ち寄せてくる…）

■改訂版「會津八一 悠久の五十首」（和泉久子選訳 會津八一記念館編）より

（注）會津八一の原作の短歌はすべて平仮名書きで旧仮名遣いです。応募者が理解しやすいように当記念館が刊行した入門書「會津八一 悠久の五十首」（改訂版・新潟日報事業社刊 税込み1,337円と郵送料）で紹介した漢字交じりを掲載しました。イメージをふくらませるため他の歌も知りたい方はお読みいただきたいと思います。当記念館へ申し込みいただければ、ご送付いたします。